

『閑居友』全注釈（一）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-02 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064201

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『閑居友』全注釈 (一)

金沢古典文学研究会

凡例

一、本稿における全注釈は、本文・校異・通釈・語釈・鑑賞・余説・資料などで構成することを原則とする。

二、本文は岩瀬文庫所蔵本を底本として、尊経閣蔵伝為相筆本・宮内庁書陵部蔵本・尊経閣蔵譚玄本・無刊記本・続群書類従本などの諸本を以て校訂を加えた。

三、校異の部分に示した略号は、次の通りである。

為——尊経閣蔵伝為相筆本　宮——宮内庁書陵部蔵本　譚——尊経閣蔵譚玄本　無——無刊記本
本類——続群書類従本

四、底本の本文を忠実に再現するようつとめ、歴史的仮名遣と異なる部分には右傍に（ ）を付して正しい形を示した。また、本文には適宜濁点を施し、語釈欄の見出し語には修正した表記を用いた。

五、底本筆者の誤記訂正のあととはそのままに翻刻した。しかし、濁点の有無は校異の対象外に置いた。

例——汝心こころちをさし。

六、○などを付して脱文の補入を傍記した箇所は、本文にくみ入れて翻刻した。

七、明らかに本文に誤があると認められた場合は、「 」符号をつけて訂正した。

八、くりかえし符号は、「 」を以て表記してあるが、一字の場合は、「々」でさし示した。

九、会話文は、「 」を以て区分した。

十、通釈は、不自然にならない程度に逐語訳を試みた。語釈欄の○は見出し語、◇は例文をあらわす。

十一、本文翻刻を快諾して下さった西尾市立図書館に、深甚なる謝意を表したい。

〔追記〕 上巻第一話には錯簡が存するので、各諸本の本文を平常な形態に整備して校合を加えた。

〔一〕 真如親王天竺にわたりたまふ¹事

昔、真如親王といふ人いまそかりけり。ならの御門ノ²第三の御子也。いまだかしらおろしたまはぬ
 さきには、たかお³か4の親王とぞ申ける。かざりを⁴と⁵したまひてのちは、道詮律師にあひて三論宗を
 きはめ、弘法大師にしたがひて真言⁶お⁶ならひ給けり。法門ともにおほつかなきことおほしとて、つ⁷るに⁷
 もろこしにぞわたり給ける。宗叡僧正と⁸もなひ⁸給けるが、宗叡は文殊のすみ給五台山⁹おがまん⁹とて
 ゆきたまふ¹⁰。親王はものならふべき師を¹¹たづね給けるほどに、昔¹²このやまとの国の人にて円載和尚と
 いひし¹³人の唐にと¹⁴まりたりけるが親王のわたり給よしをき¹⁴て¹⁴御門に奏たり¹⁵ければ、御門¹⁶あはれ
 みて、法味和尚といふ人におほせつけられて学問¹⁷ありけれど、心にもかなはざりければ、つ¹⁸るに¹⁸天竺
 にぞわたりたまひにける。錫杖¹⁹お¹⁹つきてあしにまかせてひとりゆく。ことほ²⁰りにもすぎてわづらひおほ
 しなど侍を²⁰みるにも、かなしみ²¹のなみだかきやりがたし。玄奘法顕などのむかし²²のあとにおもひあ
 はするに、もさこそはけはしくあやうく侍けめとあはれなり。さて返給べき²³ほどもすぎぬれば、いきし
 にわきまへ²⁴がたしとて、こまかにぞたづねありける。もろこしの返事に、天竺にわたり給ほどにみちに
 て²⁵おほ²⁵りたまふよしほのかにきくと侍けるにぞはじめてたまし²⁶るを²⁶う²⁶つし給よしをしりにける。わた
 りたまひける道²⁷のよういにかかんじを²⁸三もちたまひたりけるを、つかれたるすがたしたる人いできてこ
 ひければ、とりいで²⁹中にもちい²⁹さきをあたへ給けり。この人「おなじくは、おほきなるをあづからばや」
 といひければ、「我はこれにてすゑもかざらぬ道²⁹ゆくべし。汝はこゝのも人と也。さしあたりたるう
 へ³⁰を³⁰ふせぎてはたりぬべし」とありければ、この人「菩薩の行は引さる事なし。汝心³¹ちいと³¹し。心³²ちい³²さ
 き人の³²ほどこそものをば³³うくべからず」とて、かきけちうせにけり。親王あやしくて³⁴化³⁴人の出来てわ
 がこゝろを³⁵はかりたまひ³⁶けるにこそ³⁷とくやしくあぢきなし。さて、やう³⁸す³⁸みゆくほどに、つ

いに⁶⁰39虎にゆきあひてむなしくいのちおはりぬとなん。このことは、親王の伝にもみへ⁴⁰侍らねば、しるし
いれぬるなるべし。昔のかしこき人々の天竺にわたり給へる41事をするせるふみにも大唐新羅の人々はか
ずあまたみえ侍42れど、この国の人は一とりもみえ⁴³さんめるにこの親王のおもひたち給けん心のほどい
とくあはれにかしこく侍り。昔は、やすみするまうけのすべらぎにて、もとの44つかさにあふがれぎと
いへども、いまは道のほとりのたびのたましい⁴⁵として、ひとりいづくにか46おもむき47たまひけん48と返
々に49あはれに侍り。大唐の義朗律師の天竺にゆくとて身を50ほろぼしたる事をいふ所に、師子州にもす
でにみえ51ず。中印度にもまたきこえず。おほくはこれたましる⁵²異代53にかへるらんと侍事54おもひ55い
でられて、とにかくに心すぞろに侍56。さても57しん王58の身ははるかのさかひにうつり給けれども、みつ
きものは猶あとにそなへられけん事⁵⁹なざけふかくきこえ侍れ。さても発心集には伝記の中にある人々あ
またみえ60侍めれど61、このふみには伝にのれる人を62ばいること63なし。かつは、かた⁶⁴は⁶⁵かり
も侍り。またよの中の人のならひは、わづかにおのれ65がせばくあさくものを66みたる67まゝに、これは
それがしがしるせる68ものゝ中にありし事ぞかしなどよにもたやすげに69いふ人もあるべし。また、もと
よりふでをとりてものを70しるせるものゝ心ざしは、我この事71をしるしとどめずは、後のよの人いかで
かこれをするべきと思よりはじまれるわざなるべし。さればこそ章安大師はこの事もしおちなば将来もか
なしむ72べしとはかきたまふらめ。いはんや、またふるき人の心も73たくみに、詞もとゝのほりて74しる
せらん⁷⁵おや⁷⁶、いまあやしげにひきなしたらん76もいかゞとおほえ侍。またこのかきしるせるおぐどもに、
いさゝか天竺⁷⁷晨旦日域⁷⁸のむかしのあとをひとふでなどひきあはせたる事77の侍は、これお78はしにてしり
そむるえともやなり79侍らんなどおもひたまひ80て、つかうまつれる也。長明は、人の耳をも81よろこばし
めまたけちえんにもせむ82とてこそ僧83のうちの人も84のせけん⁸⁵お、よの人の86さやうにはおもはで、
侍にならひてかやうにもおもひ87侍る88なるべし。ゆめくくさがくれなきかげにも、我をそばむる詞か
なとおもふまじき也⁸⁹。

〔校異〕

1 たまふ↓給ふ(譚・無・類) 2 御門ノ↓御門の(宮・譚・無・類) 3 御子也↓おん子なり(類) 4 た
 かおか↓たかをか(譚・無・類) たか岡(宮) 5 かざりをとし↓かざりをおとし(宮・譚・無・類) か
 ざりおととし(為) 6 真言お↓真言を(宮・譚・無・類) 7 つるに↓ついに(為・宮・類) 8 とゝもなひ
 ↓とともなひ(無・類) 9 おがまん↓をがまん(宮) 10 ゆきたまふ↓ゆき給ふ(無・類) 行給ふ(宮) 行
 玉ふ(譚) 11 師を↓師お(為) 12 昔↓むかし(譚・無・類) 13 といひし↓とていひし(為) 14 きゝて↓
 聞て(譚) 15 奏たり↓奏したり(無・類) 16 御門↓御心(為) 17 学問↓がく問(宮) 18 つるに↓ついに
 (為) 19 錫杖お↓錫杖を(宮・譚・無・類) 20 侍を↓侍お(為) 21 かなしみ↓かなしび(譚) 22 むかし↓
 昔(為・宮) 23 返給べき↓かへり給べき(無・類) 24 わきまへ↓わきまゑ(為・宮) 25 みちにて↓道にて
 (為・宮) 26 たましゐを↓たましゐお(為) 27 道の↓みちの(譚・無・類) 28 大かんじを↓大かんじお
 (為) 29 道お↓道を(宮) みちを(譚・無・類) 30 うへを↓うゑお(為・宮) 31 行は↓給は(譚・無・
 類) 32 汝心ちいさし。心ちいさき人の↓汝心ちいさき人の(宮) 汝心ちいさし。心ちいさからん人の
 (無・類) 33 をば↓おぼ(為) 34 あやしくて↓あやしく(宮) 35 こゝろを↓しるを(宮) 36 はかりたまひ
 ↓はかり給ひ(譚) はからひ(無・類) 37 こそ↓ぞ(類) 38 やうく↓やうやう(類) 39 ついに↓つるに
 (譚・無・類) 40 みへ↓見え(譚・無) 見へ(類) 41 わたり給へる↓渡り玉へる(譚) 42 みえ↓みへ(類)
 43 みえ↓みゑ(為・宮) 44 もゝの↓ももの(譚) 45 たましい↓たましゐ(譚・無・類) 46 いづくにか↓い
 づくに(類) 47 おもむき↓をもむき(譚) 底本の「む」は「ひ」にも似るが「む」と判読 48 けん↓底本
 は「てん」ともよめる 49 返々に↓返々(為・宮) 返々も(無・類) 50 身を↓身お(為) 51 みえ↓みへ(為)
 ・宮・類) 52 たましゐ↓玉しゐ(譚) 53 異代↓累代(類) 54 かへるらんと侍事↓かへと侍る事(無・類)
 55 おもひ↓思(無・類) 56 心すぞろに侍↓こゝろすゞろに侍り(無・類) 57 さても↓「さても」の「も」
 ○の右横に書写(為) 58 しん王↓親王(宮) 59 事↓事(為) 事こそ(宮) こそ(譚・無・類) 60 みえ↓みゑ

(為・宮) 見え(譚・無・類) 61 侍めれど↓「め」小さく傍書(為) 62 人を↓人お(為) 63 こと↓事(譚)
 64 かた↓かたがた(類) 65 おのれ↓をのれ(譚・無・類) 66 ものを↓ものお(為) 67 見たる↓見たる
 (譚・無・類) 68 するせる↓せる(無・類) 69 たやすげに↓たはやすげに(譚・無) 70 ものを↓ものお
 (為) 71 事↓こと(譚・無・類) 72 かなしむ↓なしむ(宮) かなしぶ(譚) 73 心も↓こころも(無・類)
 74 ととのほりて↓ととのをりて(譚) 75 するせらんおや↓するせらんおや(為) するせらんを(宮) する
 せんを(譚・無・類) 76 らん↓らむ(為・宮) 77 事↓こと(譚・無・類) 78 これお↓これを(宮・無・
 類) 79 侍は、これおはしにてしりそむるえともやなり(欠文・譚) 80 おもひたまひて↓思ひ玉ひて(譚)
 思ひ給ひて(無・類) 81 耳をも↓耳おも(為・宮) 82 せむ↓せん(無・類) 83 僧の↓伝の(為・宮・無・
 類) 84 人おも↓人をも(宮・譚・無・類) 85 けんお↓けんを(譚・無・類) 86 人の↓人(宮) 87 おもひ↓
 思ひ(宮) 88 侍る↓侍(為・宮) 89 也↓なり(為・宮)

〔通釈〕

〔一〕真如親王が天竺にお渡りになること

昔、真如親王という人がいらっしゃった。平城天皇の第三皇子である。まだ剃髪なされない前には、高岳の親王と申した。落飾なされたのは、道詮律師にあつて、三論宗を究め、弘法大師に従つて、真言宗をお習いになった。どちらの教法にも、理解の及ばないことが多いというので、ついに唐にお渡りになった。宗叡僧正とお連れ立ちになったが、宗叡は、文珠（菩薩）のお住みになる五台山を拜もうというので、お行きになる。親王は、ものを習うべき師を、おたずねになるうちに、昔、この日本人で、円載和尚といつた人で、唐にとどまっていた（人）が、親王がお渡りになったことを聞いて、（唐の）帝に申し上げたので、帝は（親王の御心に）感心して、法味和尚という人に仰せつけになって、（親王は）学問（修業すること）があつたが、心にもかなわなかつたので、ついに天竺にお渡りになった。錫杖をついて、足にまかせてひとりでゆく常識をこえてつらいことが多い、などありますのを見るにつけても、悲しみの涙を払いのけがたい。女装や法願などが、（天竺に渡つた）昔の事跡を思い比べるにつけても、さぞかし、（途中の山路は）けわしく危いことであつたでしょう、と心うたれる。さて、お帰りになる予定の時も過ぎたので、生死のほども知りがないというので、（日本の朝廷から）こまごまとおたずねがあつた。唐からの返事に、（真如親王が）天竺にお渡りになるときに、道中でなくなられた由を、うすうす聞いている、とありましたので、はじめ（親王が）魂を（あの世に）おうつしになったことを知つたのであつた。お渡りになる道中の用意に、大柑子を三つ、お持ちにな

つていたのを、疲れた姿をした人が出て来て、乞うたので、とりだして、中でも小さいのお与えになつた。この人は、「同じことなら大きなのをもらいたいのだ」と言つたので、「私は、この大柑子をたよりとして、末も定めぬ道を行こうとしている。おまえは、この地元の人である。当面の飢えを防げば足りるはずだ。」と言つたところ、この人は、「菩薩の行は（利他の行だから）そんな（心のせまい）ものではない。おまえは心が小さい。心の小さい人の施す物は、受けることができない」と言つて、ぱつと消え失せてしまった。親王はふしぎに思つて、「（神仏）の化身が出てきて、自分の心をおためしになつたのであつた」と後悔され、諦め切れぬ氣もちである。さて、だんだん進んでゆくうちに、とうとう、虎に行きあつて、むなしく命を終つたという。このことは、親王の伝にも見えますので、記し入れたのでございます。

昔すぐれた人々の、天竺にお渡りになったことをしるした本にも、大唐や新羅の人々は、たくさん見られますが、この国の人にはひとりも見えないようですが、この親王の思い立ちなされた心の程は、たいへん感動的で敬服すべきことです。昔は、天下をおさめる皇太子であつて、百官に仰がれたというのに、今は、路傍の客死の靈として、ひとり、どこへいらつしやつたのであろうかと、つくづくお氣の毒であります。大唐の義朗律師の、天竺にゆくというので身を亡ぼしたことを言うところで、「師子州にもすでに見えず、中印度にもまた聞えず、たいていは、魂が、あの世に帰っているのであろう」とありますことが、自然と思ひ出されて、いずれにしても、心がむやみと動かされることです。それにしても、親王の身は、はるかな遠いところで遷化されたけれども、親王のご領地への貢ぎ物は、なお、のちのちまでも、お供えになつたということは、

情深いことだとの評判です。さて、『発心集』には(古来の)伝記の中に(記述の)ある人々が、たくさん見えているようですが、この本には、伝(記)にのっている人を入れることはない。(入れると)一方では、あれこれと、さしつかえのあることもあります。また、世間の人のならわしでは、自分の、狭い、浅い、物の見方に従って、「これは私が記したものであることだよ」などと、実に無雑作に言う人もあるにちがいない。また、元来、筆をとって物を記した者の意図は、「自分が、このことを記録しないなら、後の世の人は、どうしてこれを知ることができよう。(できはしないのだ)」と思うことから始まったことであるはずだ。だからこそ、章安大師は、「このことが、もし漏れてしまったら、将来も悲しまねばならぬ」とお書きになっているのであろう。いわんやまた、昔の人が、構想も巧妙で、表現も整理されて書き記しているようなものを、それを今、不体裁にわざわざ引用するようなこともどうかと思われまます。また、この書き記した(話の)末尾に、ちょっと、天竺、震旦、日域の昔の事跡を、簡単に対照したことがありますのは、これをいとぐちとして、知りはじめの縁ともなりましようか、など思ひまして、書かせて頂いたのです。長明は、人の耳をも喜ばせ、また結縁にもしようというので、伝(記類)の中(に)のせられた(人)をも、のせたのだからが、世間の人が、長明の願ったようには思っておりませんがよくわかるにつけて、(私も)伝記中の人は入れまいとも思いますのでございます。決して、あの世(の人)となった(長明)も、自分を非難することばだと思つてはならないことである。

〔語釈〕

○真如親王 生没不詳。(杉本直治郎氏『真如親王伝研究』の説によれば、延暦一八年—貞観七年。七九九—八六五)高丘親王。隣居太子。頭陀親王。通明。真忠とも。(橋本進吉氏「高岳親王の御事蹟に關する一二の研究」によれば、法名は初め真忠、のち真如、さらに通明と称したものと考えられている。)平城天皇第三皇子。(『三代実録』等)(一説には第一皇子)。母は贈従三位伊勢継子。(『本朝皇胤紹運録』等)第一皇子は阿保親王。第二皇子は名不詳で、共に異母兄。同母弟妹には、第四皇子巨勢親王。第一皇女上毛野内親王。第二皇女石上内親王。第三皇女大原内親王などがある。(久野芳隆氏『真如親王』)大同四年(八〇九)皇太子となつたが、薬子の変(「ならの御門」語注の項でふれる)に連座、翌弘仁元年太子を廢せられた。弘仁三年、四品に叙せられ、(『類聚国史』)同年出家したものとと思われる。

杉本直治郎氏は、東大寺凝然の『和漢春秋』の注記に従つて出家の年を二十四歳と解し、父平城二十六歳、母二十八歳、兄阿保親王八歳の時誕生したと見なした。これに従えば、立太子は十一歳、入唐は六十四歳、羅越での客死は六十七歳と考えられる。出家以前の子に、在原善淵、同安貞などがあつた。(『三代実録』等)

三論を道詮に学び(『扶桑略記』)、真言を空海に学び(『密宗血脈鈔』)、齊衡二年東大寺大仏の首が落下したため、「修理東大寺大仏司校校」の職に任せられた(『文徳実録』)。大仏落慶後、国内旅行、やがて渡唐の準備をはじめ、貞観四年九月渡唐、六年長安に入った。五台山へ向う宗叡と、中途で別れ、唐の僧らに教えを求めたが意に満たず、七年、海路インドへ向つた。(『入唐五家伝

『等』。天慶五年、在唐の僧中瓊からの書状があり、親王は羅越國で客死した旨が伝えられた。(『三代実録』)。(なお、真如伝のは本説話の中心をなすので、本項についてのみ、なるべく典拠をか項つこ内に明らかにした。他は紙面の關係で省略に従った。別に資料の項をも参照されたい。)

○天竺 インドの古称。◇「天竺へ石の鉢とりにかかる」(『竹取物語』)

○昔 説話の書き出しの形式の一つである。『閑居友』では、昔・中比・近比という三区分をもって、多くの説話を書き出されている。上巻冒頭部の説話が、第一から第七話まで、「昔」形式をとっていることから、冒頭部に比較的古い時代の説話を配列しようと考えていたと思われる。「昔」形式は、最も古い基本的な方式で、つとに『日本霊異記』にも上巻に六話ほど散見するが、中古末に至ると「今昔」式が発生する。『打聞集』や金沢文庫本『観音利益集』などが、ほとんど「昔」形式で構成されているのに対して、『今昔物語集』や『古本説話集』はすべて「今昔」式で統一されている。

これが『宇治拾遺物語』になると「九六話中」「昔」式三五話、その他二話と分化する。十三世紀に入って『閑居友』に先立って成立した『発心集』では、全説話一〇二話中、時代に關する要素をもって書き出しているものが五一話あり、そのうち「昔」六、「中比」二三、「近比」(近クも含む)「一五という割合になっている。『閑居友』は、説話の書き出しという点では、『発心集』の形式を完全に踏襲している。『撰集抄』に至ると、この三区分法中の、「近比」よりも、さらに最近のことを、「過ぎにし比」とか「いづつ比」などという形でもって書き出している。国東文麿氏は、「仏教説話文学管見」(『仏教文学研究』昭和四一年度所収)の中で、

「発心集や撰集抄の説話の冒頭には『昔』ではじまるものが極めて少ない。それに代って、『中比』『近比』『過ぎにし比』などが多い。それは説話に作者の見聞談としてのべられているものが多くあることと応ずる」とし、それは、それら作品が「説話の形による仏教隨筆・仏教感想文」としての性格を持つことと関わっているとしている。なお、説話の冒頭表現については、春日和男氏の「『今昔』考」(『國語国文』昭和四一年七月)なる論考にも詳しい。

○いまそがり 語源は「います・が・あり」か。「いますがり」の形の方が用例としては多く、たとえば、『竹取』に一例、『大鏡』に五例などがある。「いまそがり」は『伊勢』に六例集中しているが目立つ。「あり」「をり」の尊敬語で、ラ行変格活用の動詞である。◇「はる／＼能登の境までいまそがりて」「富家入道殿、中将にていまそがりけるころ」(共に『撰集抄』卷三)

○ならの御門 平城天皇。(宝龜五年——天長一年・七七四——八二四)第五一代。在位八〇六——八〇九。桓武天皇の皇子。母は藤原良繼の娘乙牟瀨。名は安殿。諡号日本根子天推国高彥天皇。冗費節約、人員整理などの政策を行った。藤原薬子を寵愛し、その兄仲成を重用した。大同四年(八〇九)病により、弟嵯峨天皇に譲位したが、仲成・薬子兄妹は平城の重祚を圖つた。これを薬子の変という。が、弘仁元年(八一〇)鎮圧され、平城帝は出家、真如親王も、平城帝の子として、皇太子の位を退くのやむなきに至つた。弘仁十二年(八二二)、空海から、天皇としてはじめて灌頂を受けた。

○第三の御子也 『三代実録』に「親王者平城天皇之第三子也」とある。なお第一子とする説もある。

○いまだかしらおろしたまはぬさきには、たかおかの親王とぞ申け

る『統日本後紀』には、「平城旧宮処水陸地卅余町永賜高岳親王親王者天推国高彦天皇第三子也」とある。また、「遂遭事變。失位。落髮披緇位于東寺」ともある。

○かざりをおとし 髪をそって仏門に入ること。◇「過去ノ諸仏モ菩提ヲ成ゼムガ為ニ削テ髮ヲ剃給フ」(『今昔物語集』・卷一) ○道詮律師 (?——貞観一八年・八七六)。武蔵の人で、三論宗の僧。早く法隆寺に入り、三論及び密教を学んだ。嘉祥三年(八五〇)仁明天皇の臨終に受戒した。貞観元年権律師に任ぜられた。夢殿の荒唐を嘆き、藤原良房に請うて、これを修復した。のち福(富)貴寺を創して退居し、貞観一八年高齢で寂した。著に『四相違私記』、『劫章頌記』がある。三論を真如親王に教えたことは、『扶桑略記』などが伝えるところである。

○三論宗 南都六宗の一。インドの竜樹の『中論』『十二門論』、その弟子提婆の『百論』の三論をよりどころとしているのでこの名がある。般若の(入空)の思想を中心とするため「空宗」とも呼ばれる。鳩摩羅什によって中国に伝えられ、隋から、唐代の、吉藏(嘉祥大師)によって大成された。日本では、吉藏の弟子の高麗僧慧灌が推古天皇三年(六二五)、飛鳥の元興寺に住して伝えた。その弟子智藏は、入唐して吉藏に学び、法隆寺で弘通につとめた。法隆寺、元興寺、大安寺などが主な道場で、飛鳥、奈良時代の仏教史に大きな位置を占めた。

○三論宗をきはめ 『扶桑略記』には、入唐した真如が、道詮に書を寄せて、「漢家諸徳多之。論学問有意。無及吾師」としたこと、道詮の学問の高さと、真如の故国における勉学の程度の深さを共に褒め書きする。なお、『扶桑略記』に、「親王機識明敏。学渉内外。聰受領悟。罕見其人」とある。

○弘法大師 (宝龜五年——承和二年・七七四——八三五) 讃岐の人で、日本真言宗の開祖。俗姓佐伯、幼名真魚。法名空海。密号は遍照金剛。延暦一〇年、勤操について出家、同三年遣唐使に従って入唐し、長安の恵果に密教を学んだ。大同元年(八〇六)帰国、のち東大寺別当となり、高雄山寺で最澄らに灌頂を授けた。高野山に金剛峯寺を開き、東寺を賜わり教王護国寺の勅号を受けて、鎮護国家の祈禱道場とし東密の本拠地とした。綜芸種智院も創立した。博識多才で、詩文集『性靈集』、文芸論書『文鏡秘府論考』、辭書『篆隸万象名義』などを著わし、書道においては日本三筆の一で、『風信帖』などを残している。仏教上の主著は『頭密一教論』、『十住心論』、『即身成仏義』などである。南都仏教と激しく対立した日本天台宗祖の最澄とは異なり、思想人物共に、寛容、宥和的で、嵯峨天皇をはじめとする、皇室、貴族らから、深い崇敬をうけた。

○真言をならひ付けり 「真言密教究竟秘奥」と『扶桑略記』にしている。弘法と真如が、歌を交換した逸話は、『弘法大師御行状集記』『十訓抄』などで有名だが、真如が弘法門下であったことは、東寺文書等によっても裏付けられている。『江談抄』では、真如を、弘法の十大弟子の中に教えている。

○真言 真言宗のこと。大日如来を教主とし『大日経』『金剛頂経』などをよりどころとしている。大日如来が金剛薩埵に秘密に伝えたとされる秘密法門で、竜樹(竜猛)、竜智等に受けつがれたが、中国では一宗をたてることがなかった。延暦二三年(八〇四)空海が入唐して、第八祖と称され、日本に伝え、平安時代に盛行した。古義真言宗、新義真言宗の各派がある。

○法門ともにおぼつかなきことおほし 「法門とも」は、「法門ど

もに」とも「法門共に」とも取れる。前者の場合、「仏法」といった抽象的な意(例「一乗の法門するる事にや」『狭衣』)では、複数を示す「ども」が落ちてかぬから、「經典」のような具体的事物を指すと思われる用例(例「伝法門道具仏舍利等」、「所詣来法門一百廿三部。仏舍利三千粒等」共に『入唐五家伝』)にならって解したいところ。後者の場合だと、「教法」「仏法」の意で、先に「三論」「真言」を並記しているのが、「共に」と解する手がかりとなる。また『扶桑略記』に「貞観三年上表曰。真如出家以降四十余年。企三菩提。在一道場。竊以菩提之道不必一致或住或行。乃禅乃学而一事未遂」とあるのも傍証にならうか。一応後者の意に解しておくが、なお後考に待ちたい。

○おぼつかなき 「おぼつかなし」とは、木之下正雄氏が『平安女流文学のことば』(昭和四三年・至文堂)で説かれるように、「不分明に感じる心情の表現」から、「転じて、そうした不分明を早く明らかにしたい」気持を表わす。学ぶほど疑問が生じ、早く、それを解明したいという真如の気持を示しているといえよう。『扶桑略記』『東大寺要録』には、「親王心自以爲真言宗義師資相伝猶有不通。凡在此間難可質疑。況復観電露之遂空願形骸之早棄。苦求入唐了悟幽旨乃至遮幾尋天竺矣」と、そうした心理が裏付けられている。

○もろこし 中国の古称。◇もろこしの遺き境につかはされ(『万葉集』八九四)

○宗叡僧正 (大同四年——元慶八年・八〇九——八八四)京の人で、真言宗の僧。入唐八家の一。俗姓池上氏。世に後入唐僧正、禅林寺僧正、円覚寺僧正等と称す。十四歳で出家、比叡山の義真・円珍などに学び、また興福寺義演に法相を学び、禅林寺の真紹(叔

父)から密灌を受けた。貞観四年真如親王に従って、入唐、天台山に登り、法全、造玄、智懸輪などから真言の秘奥をきわめ、帰国して禅林寺に住した。清和天皇に重んぜられ、東寺に灌頂壇を開いた。元慶三年(八七九)東寺長者になり、僧正に補し、円覚寺に住んだ。同八年寂した。著に『胎藏次第』、『悉曇林記』『後入唐伝』『秘密口決』などがある。『入唐五家伝』には、真如についての『頭陀親王入唐略記』とならんで、宗叡についての『禅林寺僧正伝』も収められている。

○とよもなひ 「ともなふ」を「連れ立つ」という自動詞とする。『撰集抄』に「宗叡は帰朝すれども、ともなひ給へる親王は見え給はねば」とある。

○文珠のすみ給五台山 円仁の『入唐求法巡礼行記』にも「昔者。孝文皇帝。住此五台遊賞。文珠菩薩化爲僧形。從皇帝乞一座具地。皇帝許之。其僧見許已。敷一座具。滿五百里地」等、文珠が五台山に住む話題は多い。その他『日本靈異記』上―5や『今昔物語集』十九―2など、文珠と五台山の関わりを説いた説話も多い。

○宗叡は……五台山をがまんとして、ゆきたまふ 『頭陀親王入唐略記』には「但宗叡和尚。依有宿自下州相別。取河中符道向五台山」とある。

○円戴和尚といひし人の、唐にとよまりたりけるが 生没不詳。九世紀の人。大和の人で、最澄に師事し、承和六年(八三九)入唐した。円珍・円仁・真如などの入唐僧をあっせんしたことが多く、前掲『入唐略記』にも、「即本國留學円戴法師奏聞親王入城之由」とある。在唐四十余年、八七七年に帰国しようとしたが、暴風にあつて、海上で死んだ。「いひし人の」の「の」は同格を示す。「とよまりたりけるが」の「が」は主格を示す。

○御門 貞観七年(八六五)で、すなわち唐の咸通六年のことだから、唐の懿宗である。

○御門あはれみて 尊経閣感伝為相筆本のみが「御心」と表記。

○御門の場合「御門が(親王の志に感じ入って)」となり、「御心」とすれば「(唐帝が)親王の志に感じ入って」と解され同内容となる。唐帝が親王の、強い求道心に感激した、と解しておきたい。「入唐略記」は「皇帝感歎」と記しており、『撰集抄』(六一ノ一)には「もろこしのみかど、渡天の心ざしをあはれみて」としているのも傍証になろう。

○法味和尚 伝不詳。鷲尾順教氏「高岳親王の御出家及び御入竺の壮挙」(『日本仏教文化史研究』所収)によれば「当時長安には法金法味等の大徳あり、就中法金阿闍梨は我国の円珍、円仁、円載等が師事して、秘密灌頂を受けたる所なり。親王は阿闍梨に見え、同じく秘密灌頂を受け、金剛胎藏兩界の印信を伝へ給ふ」とある。あえて想像すれば、親王も灌頂を受け、円珍、円仁、宗徹等数々の高僧も師事した法全を「心にもかなはざりければ」という叙述の対象とすることを避けるため、作者が代替の人物としてえらんだ人とも考えられる。

○学問ありけれど (法味和尚は)学問のある人だったが、とも、(法味和尚などと、親王は)学問修業(することが)あったが、ともとれる。一応、後者に解しておくが、なお後考にまちたい。

○心にもかなはざりければ 『入唐略記』には「仰請来阿闍梨令決難疑。經六箇月。問難闍梨不能擊蒙」とあり、『扶桑略記』には「親王遍詢衆徳疑碍難決。送書律師道詮曰。漢家諸徳多之。論學歷問有意。無及吾師」とある。

○つひに天竺にぞわたりたまひける 『入唐略記』には「同更令円

載奏可渡西天竺。且事勸許。官符施行」とある。真如の行動の軌跡が、求道心にもとづく、たえざる自己否定の連続であることにも注目したい。(本誌の藤本論文を参照されたい。)

○錫杖をつきてあしにまかせてひとりゆく 『扶桑略記』には「親王遂杖錫。就路脚孤行」とある。全般に『閑居友』の叙述は、『扶桑略記』系統の真如伝を参看している形跡が強いが、この部分など直訳に近い。なお「ひとりゆく」とあるが、従者も何人かいたことは、『頭陀親王入唐略記』に記されているところである。

○ことわりにもすぎてわづらひおほし この叙述に相当する典拠資料は見及ばなかった。◇めぐりあふ春はいそぢの老いが世にことわりすぎてかすむ月かな(『新後撰集』)

○など待をみるにも 前述の各註記にも明らかのように、『扶桑略記』系統の真如伝を見た可能性が強い。『扶桑略記』に「已上出本伝」、『東大寺要録』に「真如親王伝云」などとあって、鎌倉時代に親王の本伝は存在したと思われる。

○かなしみのなみだかきやりがたし 『閑居友』作者は、全体として、悲哀の情念の色濃い叙述態度をとっている。こもその一例である。なお鑑賞の項を参照されたい。

○玄奘 (六〇〇—六六四) 唐代の僧で、法相宗・俱舍宗の開祖。河南省の人。貞観三年長安を出発。インド那蘭陀寺の戒賢などについて学び、同一九年(六四五)帰国後は、経論一千三百余巻を翻訳、旧訳に対し新訳と称された。慈恩大師ははじめ三千の門下を擁した。『大唐西域記』は東洋最大の旅行記とされる。

○法顯 生没年未詳。四世紀末より五世紀はじめに活躍した。東晋代の僧で平陽武陽の人。隆安三年(三九九)長安を出発、インド・セイロンで梵語・梵文を学び、義熙二〇年(四一四)帰国、『大般涅槃

『藥經』などの訳や、インド旅行記『法顯伝』（または『仏國記』）などの著がある。八十歳で没した。

○あと 事跡。先例。◇「思ひあまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞたぐひなき」（『源氏物語』若菜上）

○さこそは さぞ。◇「さこそ異様なりけぬ」（『徒然草』）

○けはしく 管見に入った「けはし」の用例は、「風」を主語とする少い例の他は、すべて「山（路）」を主語とするものであるのだ。「（途中の山路は）」という語を補って訳した。

○返給べきほどもすぎぬれば、いきしにわきまへがたしとしてこまかにぞたづねありける 『三代実録』で、真如親王の子らが、朝廷に上表した文の中で、「親王入唐後。多歴年序帰朝之期已過。存亡之分難決」とある。「こまかにぞたづねありける」に相当する典故は見及ばないが、親王でもあるから、朝廷から唐朝へ、何らかの照会のあったことは推察できる。

○もろこしの返事に、天竺にわたり給ほどに、みちにておはりたまふよしほのかにきく 『三代実録』に「無品高岳親王志深真諦。早出塵区。求法之情。不遠異境。去貞観四年。自辞当邦。問道西唐。乗查一去。飛錫無滞。今得在唐僧中璫申状称親王先過震旦。欲度流沙。風聞到羅越国。逆旅遷化者。雖薨背之不記。而審問之来可知焉。」とある。これによれば、日本の留学僧中璫が伝えたものである。

○たましひをうつし 魂をあの世に移す、つまり死ぬこと。『三代実録』や『扶桑略記』に同文で「親王身殞中途。神馳半月」とある中の「神馳」にあたるか。

○ようい 準備。◇「女ども」侍ふべき用意してあり。（『宇津保物語』）

○大かんじ ナツミカンの類。「だいかうじ」「おほかうじ」とも。『和名抄』に「柑子、加無之」。『日葡辞書』に、「ダイカウジ」。◇「色は赤紫にて、大柑子のはだのやうに、つぶだちてふくれたり」（『宇治拾遺物語』）なお、「大かんじ」の文学的イメージに關しては、余説③を参照されたい。

○つかれたるすがたしたる人いできてこひければ 以下の話と類似した話が『撰集抄』卷三にある。両話の關係については、鑑賞の項を参照されたい。

○おなじくは 「は」は接続助詞。（係助詞とする説もある。）形容詞「おなじ」の連用形「おなじく」に接続して、順接の仮定条件を表わす。同じことなら。

○これにて 「これ」は「大かんじ」。「にて」は、格助詞。「——」をたよりにして」の意。

○もと人 他に用例を見及ばない。「もとつ人」は、『万葉』『蜻蛉』『源氏』には、「本妻」の意で用いている。ここは前後の文脈から、「地元の人」の意に解した。

○菩薩の行はざる事なし（利他に徹すべき）菩薩のなさねばならぬ行は、そんな（自己の安全のみを願う）ものではないの意。菩薩行とは、利他の行であることについては、最澄『顯戒論』巻上に、「声聞戒者。於声聞自利。於菩薩利他。夫菩薩律儀。都無自利。以利他即為自利故」などあることから知りうる。

○心ちひさし 『撰集抄』（三一七）にも「こゝろ小さかりけり」とある。

○かきけちうせにけり この種の表現について、山口仲美氏は「かきけつやうにうせぬ」（『説話文学研究』第六号・昭和四七年）で、説話——それも、仏教的、怪異的なそれに頻出する表現である

ことを明らかにしている。なお、化人が、「心の小ささ」を批判して姿を消す点で本説話の類話である、『撰集抄』三丁七では「かき消すがごとく失侍り」とある。山口氏論文も説くように、仏教系奇譚の一種の定型であったと考えられる。円仁の『入唐求法巡礼行記』にも、文珠の化した「孕女」が、僧に平等供養を要求する説話があり、『今昔』巻二〇—40にも類話がある。

○くやしくあぢきなし 「源氏物語重要語句の詳解」(「解釈と鑑賞」昭和三四年増刊)中の河辺名保子氏の説によれば、「くやし」は「自分自身の過去の行動をふりかえって、とりかえしがつかない」と胸を痛める「気もちを表わし」、「あぢきなし」は「はじめ対象に惹かれていた気持が一転して投げやりになってしまふような、いわば興味索然といった感情を表わす」語である。一応の慈悲を施したつもりでいたところ、自己の慈悲心の限界を指摘され、後悔と絶望の淵におとされた真如親王の心情が、この二語に、よく集約されている。

○虎にゆきあひて、むなしくいのちをはりぬとらん 永井義憲氏は、「閑居友の作者成立及び素材について」(『日本仏教文学研究』昭和四一年豊島書房)で、「この『閑居友』所収説話が現存最古の親王虎害説であろう。この書の作者が入宋に際して得た知識の一つがこの虎害説である」としている。また、鷲尾順敬氏は前掲論文で『金光明経』中の摩訶薩埵の捨身飼虎の「経説が高岳親王の事蹟を縁飾せらるゝことになりたることと思はる」としている。共に、注目すべき説である。鷲尾氏も指摘するように、「捨身品の説意は早く玉虫厨子の側面に図せられ」ていたし、たとえば、『三宝絵詞』にもその話題は収められていた。『閑居友』作者と目される慶政と親交のあった明恵について、直弟子喜海の書いた『梅尾明恵

上人伝記』にも「我本師能仁の古へは鳩に替りて全身を鷹の餌とされ、又飢たる虎に身をたび候しぞかし」などの記述も見え、『撰集抄』(一一八)(九一六)にも同様の記述があり、当の慶政自身の歌に、「思ひきや虎ふす野べと聞おきし唐国寒き旅寝せんとは」(『万代和歌集』)と、異国と虎の関わりを歌ったものもあり、求道の王子と虎害説の結合しえた説話的発想の根のようなものをのぞかせているのである。ただし、『金光明経』のように、親王は、進んで虎に身を与えていない点、同様の観点をより強調している『撰集抄』の真如説話とも対比しつつ、注意しておきたい。この問題については、本誌藤本論文にも言及するところがある。なお、鑑賞の項をも参照されたい。また、『金光明経』捨身品の原文を次にかかげておく。「爾時王子摩訶薩埵還至虎所脱身衣裳置竹枝上。作是誓言。我今為利諸衆生故。証於最勝無上道」。なお、虎害説に関しては、杉本直治郎氏の『真如親王伝研究』に詳しい。また、久保田淳氏は「(真如が)敬慕される理由は、その信仰心の深さそのもののゆえであって、その法験のゆえではない」ことを、『閑居友』の方法の一つの特色として挙げている。(「魔界に堕ちた人々」(『中世文学の世界』所収)真如説話を読む上で注意しておきたい説である)。

○このことは、親王の伝にもみへ侍らねば「このこと」の指示内容が、「虎害説話」を含むことは明らかだが、「大柑子説話」を含むか否かはここに言う「親王の伝」の内容が分明でない以上断言はし兼ねる。が、現存諸資料に、両説話の典拠とおほしいものは、ふたつながら見えないので、さしあたり、両者ともを指す、と考えておきたい。

○しるしいれぬるなるべし。自己の行為に、「べし」という推量の

助動詞を付して表現する手法は、『閑居友』の、他の部分——とりわけ、草子地的部分に、所々見られる。例 ◇この人の事、往生伝に待めれど、このことは侍らざめれば、しるし侍なるべし。(上2) さて、この僧都の事、発心集にも見え侍めれど、この事は侍らざめれば、よきつめでに因縁もほしく侍て、かき侍ぬるなるべし。(上1—3) など。

○昔のかしこき人々の天竺にわたり給へる事をしるせるふみ 後述するような理由からこの「ふみ」は、『大唐西域求法高僧伝』あたりと考えられる。「師子州にも……」の注参照。

○大唐新羅の人々は、かずあまたみえ侍れど 前掲『高僧伝』は、全部で五十六人あげており、新羅の人も中に七人含まれてゐる。

○この国の人ばかりもみえざんぬる 前掲書に日本人はない。

○昔は、やすみしるまうけのすべらぎにて、もよのつかさにあふがれき……いまは道のほとりのたびのたましひとしてひとりいづくにか 『三代実録』や『扶桑略記』に同文で、「昔為千乘之皇儲。今作单子之旅魄」とあるのに、表現が通じる所が多い。「まうけのすべらぎ」と「皇儲」。「もよのつかさにあふがれ」と「千乘」。

「ひとり」と「单子」。ただし、「子」は「子」の誤まりで「单子」すなわち「匈奴の酋長」の意とも解しうる。「たびのたましひ」と「旅魄」。「むかし」「いま」と「昔」「今」はもとよりだが、両者の表現の関わりを深さを示す一節でもある。

○やすみしる 「大君」「すべらぎ」などにかかる枕詞。「やすみしし」に同じ。◇やすみしる我すべらぎの御代にこそさか井の村の色もすみけれ (『玉葉集』賀)

○まうけのすべらぎ 皇太子。◇その国のみかど・后・まうけの君

(『宇津保物語』俊蔭)

○もよのつかさ 百官。多くの役人。◇「其れ群郷(まへつぎみ)百僚(もよのつかさ)いましがまことをつくして」(『日本書紀』崇神天皇訓)

○たびのたましひ 客死の霊とでも解しておきたい。「多麻之比はあしたゆふべにたまふれど吾が胸痛し恋の繁きに」(『万葉集』三七六七)や「いつまでか形にやどるたましひの離れぬ程をありとたのまむ」(『夫木和歌集』雜一八)のように、古来、「たましい」は肉体を離れても存在すると考えられた。

○返々 つづく。◇かへすがへすもすさまじといふはおろかなり。(『枕草子』二五段)

○大唐の義朗律師 益州成都の人で、求法のためインドを志し、今日のビルマを通り、インド方面へ入ったが、結局四十余歳で消息を断つたと伝えられている。

○師子州にもすでにみへず、中印度にもまたきこえず、おほくは、これたましむ異代にかへるらん この部分、『大唐西域求法高僧伝』巻上の、義朗律師の項の叙述と、次のようにほとんど符合していることに注目したい。『師子州既不見。中印度復不聞。多是魄婦異代矣』。漢文資料から推測して、「おほくは」は、「たいていは」「たぶんは」の意、「異代」は、「来世」「死の世界」の意と思われる。

○すぞろ 「すずろ」に同じ。思いもよらず、むやみにある状態に進んでゆく様を言う。この場合、「すぞろに(あはれに)侍」とでもあるべきところか。◇我がかくすぞろに心弱きにつけて (『源氏物語』蜻蛉)

○うつり給けれども 「うつる」は亡くなること。◇「いはむや、

うつりし後は、たゞ、しばしのほどの嘆きにて」(『撰集抄』)

○みつきのもの 「みつき」の「き」は、『万葉』では「美都奇」、
『今昔』では「御月」、『名義抄』でも「眞」は「ミツキモノ」と
清音であった。『日葡辞書』では、「Misou 眞」と濁音だが、

『閑居友』の年代を考えて、清音に読んでおく。

○みつきものは、猶あとにそなへられけん 親王が消息を断つたあ
とも、朝廷が、その封邑を保全したという史実を指す。すなわち、
親王の子らが、上表して父の封邑を返付しようとしたが、勅命で許
されなかった旨を、『三代実録』では、次のように記している。

「親王男大和守從四位上在原朝臣善淵。前肥後守從五位上同安貞等
上表請。親王入唐後。多歴年序。帰朝之期已過。存亡之分難決。而
偏准平常。猶受封邑。靜而思之。悚兢難耐。伏望草被返収。將免謗
議。勅。存亡難卜。何許來請焉。親王身殞中途神馳半月。昔為千乘
皇儲。今作單子之旅魄。彼菩提之求。何必出戸。元厭世心深。甚哉
苦行。親王始登震坊。世人号曰躡居太子。雖見屍。非其罪。而理有
必至。靡可顧防。豈天意乎。豈人事乎。何嬌嬖之傷化。而俗諺之如
期。書曰。牝雞之晨。惟家之索。信而有徵歟。」(卷四〇)

○発心集 鎌倉時代初期の説話集。鴨長明の作と考えられている。

『閑居友』本話の叙述も、作者は長明との説の一資料となっている。
現在の流布本は八巻だが、鎌倉時代の原形は三巻本であったと
見られている。題名が示すように、内容は、「発心」談、往生談を
中心とした仏教説話から成り立っている。「天竺震旦ノ伝聞ハ遠ケ
レハカムズ」と、序で断わっているが、例外もある。思想・文学兩
面において、『発心集』『閑居友』『撰集抄』には、この順序で、
影響関係が想定されるので、三者の交渉の様相は今後の研究課題で
ある。なお、後注と、余説①を参照されたい。

○発心集には伝記の中にある人／＼あまたみえ侍めれど 「伝記」
は先行往生伝類をさす。『発心集』は、先行往生伝類にすでに収録
されている人物を相当多くとりあげている。たとえば、『本朝往生
伝』と重複するもの五人。『拾遺往生伝』七人、『後拾遺往生伝』
二人、『本朝新修往生伝』一人。『閑居友』作者と目される慶政
は、これら三篇の他にも、『三外往生記』も書写しており、その作
業を通じて、『発心集』と、それら「伝記」の人物や説話の重複を
確認したのであろう。また『発心集』は、『今昔物語集』、『古事
談』とも、話題が重複していることは多いし、『宇治拾遺物語』な
ども重複する話題がある。

○このふみには、伝にのれる人をば、いふことなし この文言に
関しては、小林保治氏の「閑居友序説」(一)、「早稲田大学教育学部
学術研究」第一七号所収)中の解説が正體を射っているので、次に引
用したい。「ここには、往生伝・高僧伝等に収載されている人物の
話は採録しないという本書の編輯方針が語られているが、実は、真
如親王(上―1)、如幻僧都(上―2)、玄賢僧都(上―3)、空
也上人(上―4)、清海上人(上―5)等々、上巻の前半に「附置
する人々の話が、往生伝その他の文献に収められていることは自
明のことである。しかし、これらの人物に関する本書の記事は、
先行の他書には見られぬ新事実であり、それが本書の大きな特色
をなしていることもまた明らかである。したがって右の引
用文は、正しくは、『伝にのれることをば』とあるべき所であら
う」。

○かつは、かた／＼……おもふまじき也 以下は、『閑居友』執
筆意識が、最も直接に示されているところで、これについても、前
掲小林論文(一)に手際よい整理がなされているので引用しておく

い。「先行文献との重複をさけた」「理由は次の四ヶ条である」。

- ①「伝類に既に取りあげられている人物を再録することへの憚りのため」
- ②「自分がとりあげるであろう人物について既述してある書物を引き合いに出されて、つまらぬ非難を蒙るのを回避するため」
- ③「自分が書きとめることで初めて公けになり、伝承されるに至るような種類の『事』こそ筆を取るに値することと考える覚悟があるため」
- ④「心・詞たくみな古人の名文を台無しにしてしまうのではないかという懸念のため」

なお小林氏は、上記四ヶ条に加うるに、「最も直接的にして主要な理由」として、「『け』として長明の轍を踏むまい」という決意をあげている。本説話の前記「かつは」以下の部分の整理として、適切なものであるが、この、「閑居友」の執筆意識については、余説①にも言及するところがあるので、併せて参照されたい。

○章安大師（五六二——六三二）隋代の僧で、天台宗第四祖。臨海県章安の人。諱は灌頂。智者大師（天台智顛）の弟子となり、侍者としてしたがうこと十三年。博聞強記で、『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』の天台三大部をはじめ、師説を編纂して百余巻に及んだ。智顛の思想を後世に伝布した功は大きい。晩年は、嘉祥寺の吉藏と思想的交渉があったとされる。著に『大般涅槃經玄義』『同経疏』『観心論疏』『国清百録』『隋天台智者大師別伝』など八部四九巻がある。

○この事もしおちなば、将来もかなしむべし 典拠は未だ見及ばなかった。

○ととのほりて 整って。◇いと美しげにねびととのほりて（『源氏物語』明石）

○かきしるせるおくだもに、いさゝか天竺 震旦 日域のむかしの

あとを ひとふでなどひきあはせたる事の侍は この文言についても、前掲小林氏論文(白)に考究がある。結論のみを引用すると、「おとく」というのは、話のあと、所謂「説話説教」的な部分」と解すべきで、「天竺・震旦・日域」それぞれの故例がほぼその順次に登場するという動かぬ傾向性が確認される」としているのは、従うべき見解であると思われる。

○おく ここでは、末尾、付加部を意味する。◇歌召しける時に、奉るとてよみて、おくにも書き付けて奉りける（『古今集』雜下）

○日域 日出づる国の意。日本の別称。◇日域に渡って那智山といふ所に（『平治物語』）印度西天之論家中夏日域之高僧（親鸞『正信念仏偈』）

○はし 端緒。いとぐち。◇逢ひ見むと言ひ渡りしは行く末の物思ふことのはしにぞありける（『千載集』恋四）

○え 縁 ◇秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけり（『伊勢物語』）

○おもひたまひて 「たまひて」だと、四段活用で尊敬の敬語になり、動作主の自分を尊敬することとなって文法上不合理である。

「おもひたまひてつかうまつれる也」と、「つかうまつる」という謙譲語と一つづきに用いられている点から見ても、全体としての文脈から見ても、「たまへて」という下二段に活用する謙譲語のくるべき所と考えられる。しかし、管見に入ったかぎりでは、「たまへて」と読みうる本文はなく、諸本とも「たまひて」であった。したがって、本文は「たまひて」としておいたが、通釈の項では「たまへて」であるべきだとの見方で訳した。なお後考に待ちたい。

○長明（久寿二年——建保四年・一一五五——一二一六）鎌倉前期の歌人。下鴨神社禰宜の家に生まれ、和歌・琵琶をよくした。建

仁元年（一一〇一）、後鳥羽上皇の『新古今和歌集』編纂のための和歌所の寄人を選ばれた。のち、下鴨神社社司を望んだが、果さず、出家し、大原山にもつた。法名を通胤と言った。大原で五年を過ごし、日野に移り、方丈の庵を作つて、隠者としての生活を営んだ。この生活の中から、歌論『無名抄』、隨筆『方丈記』、説話集『発心集』などが書かれた。

『閑居友』作者が、長明を強く意識していたことは、本説話の叙述自体にも明らかだが、『閑居友』作者もまた、歌道への深い造詣と、遁世生活への鋭い認識、そして、説話撰述者としての側面をそなえている点で、『無名抄』『方丈記』『発心集』の、八三つの顔Vを持つ長明と、きわめて類似した人間像の持ち主であることが知られるのである。

こうした側面からの、『閑居友』論は、本誌所収、青山・原田論文でも言及される所であるが、今後の研究課題でもあるだろう。なお余説①を参照されたい。

○人の耳おもよろこばしめ、またけちえんにもせむとてこそ、伝のうちの人おものせけんお 『発心集』序によれば、「道ノホトリノアダ言ノ中ニ我一念ノ発心ヲ染ハカリニヤトイヘリ」が、「人の耳おもよろこばしめ」に相当し、「ハカナク見事聞事ヲシ注アツメツツ。シンビニ座ノ右ニラケル事アリ。即賢キヲ見テ及難クトモヒ子ガフ縁トシ。愚ナルヲ見テハ自ら改ムル媒トセムトナリ」は、「けちえんにもせむ」に相当するようと思われる。なお、『方丈記』にも、「芸はこれ拙なけれども、人の耳を喜ばしめんとはあらず」とあり、「首の見ゆるごとくに、額に阿字を書きて、縁を結びしむるわざをなんせられける」とあることにも注意しておきたい。○くさがくれなきかけ 「草がくれ」は『源氏物語』蓬生で「かか

る草がくれに過ぐし給ひける年月の」とあるように、「草深いなかのすみか」で、それもない、「かげ」だから、「あの世」、死後の長明のありどころ、と考えておきたい。『閑居友』と関係深い『撰集抄』でも、「草がくれなき跡までも、我をそむくる（イそばむる）わざなかれとなり」（一一八）とか、「いとどつたなき筆の跡ふしをもそばむる業なくて、草がくれ、なき跡までも、そしりをば我にな残しそと覚て侍り」（一二八）のように、本節と同じく、各卷末説話の末尾部分、筆者の自己弁明を語る箇所において、「草がくれなき跡」という言い方ではあるが、それも「そばむ」という言い方に関連づけて用いていることも、先の見解の傍証になりそうである。が、なお、後考を重ねたい。

○そばむる 憎んで目をそらせる、つまはじきして、非難する、の意。◇此事、書きのせぬるも、ほどかりおほく、かたはらいたく侍れども、なにとなく見すてがたきによりて、我をそばむる人の心をかへりみざるべし。（『撰集抄』九一―）

〔鑑賞〕

ここでは、鑑賞の中心を、『閑居友』第一話と『撰集抄』に表われた、その類話との比較ということにしほりつつ、『閑居友』の文学的特色の一側面の検討を試みてみたいと思う。

両者の関係については、すでに、永井義憲氏が『日本仏教文学研究（一）』中の「閑居友の作者成立及び素材について」の中で、「『撰集抄』を一説するに『閑居友』と同一の語句が少からず散在し、然

もそれらの語句は、その文脈中に於ける洗練と語感から言つて、『閑居友』が『撰集抄』に拠つたとは到底考へられず、明らかに『撰集抄』作者の意識的な改変と模倣が伺われる」としており、特に「真如親王虎書説及びその前徴とおぼしき化人出現の話は『閑居友』以前に所見はなく」「『撰集抄』作者の模倣は明らかであろうと思われる」としている所説に従うべきであろうと考へられる。

その上で、(1)『閑居友』第一話と、『撰集抄』の類話を比較したのだが、まず、『撰集抄』の主要な類話として、近衛本(岩波文庫本)巻六一の、(1)真如親王説話があげられ、次いで、同本巻三一七の(2)贈西上人説話もあげられる。

(1)と(2)では、話の展開は、ほど同じなのだが、注目すべき相違点としては、まず、(A)「大かんし」についての叙述に(1)(2)で相違があり、(2)「化人」の話は、(1)にはなく、その代りのように、(1)で、ほとんど同じプロットの話が「贈西上人」を主人公として描かれ、(2)「虎害」の扱い方について、(1)(2)にまた相違がある。

それら相違を、原文に即して検討するならば、(A)「大かんし」については、『閑居友』(以下『閑』と略す)では、「わたりたまひける道のように、大かんしを三、もちたまひける」と即物的な叙述だが、『撰集抄』(以下『撰』と略す)では、「もろこしのみかど、渡天の心ざしをあはれみて、さま／＼の宝をあたへ給ひけるに、それ由なしとて、みなみなかへし参らせて、道の用意とて大柑子を三とよめ給へりけるぞ」と一種の劇化がなされ、感情的な意味づけがなされている。

(2)「化人」説話は、(1)の説話では、贈西上人と「けしがる女」の「化人」との間で、「小袖」をめぐるほど同様の筋書で語られていたのだが、注目すべきは、付加された感想の部分で、『閑』では「くや

しくあぢきなしと侍る事思いでられて、とにかくこゝろすゞろに侍り」とあるのに対し、『撰』では、「心のほどをみづから恥しめて、悔いかなしみ給へりけるぞ」、あはれにかたじけなく覚えて侍り」とあって、感情表現の語が三対五の割合で増加していることである。

(3)「虎害」の話題についても、『閑』では、「さて、やう／＼すゝみゆくほどに、ついに虎にゆきあひて、むなしくのちおほりぬとなん」とそっけないが、『撰』では、「獅子州にてむらがる虎にあひて、食ひ奉らんとしけるに、「我身を惜むにはあらず。我はこれ仏法のうつは物也。あやまつ事なかれ」とて、錫杖にてあはへりければ、つひに情なく食ひたてまつると、ほのかに聞ゆと侍りけるに、みかどをはじめ参らせて、百の司、みなたもとをしほりけり」と、長文にもなり、劇化の傾向も著しいのである。『閑』で、義朗律師の項で用いられた「獅子州」の語が、『撰』ではおそらく、「虎」の縁語として、「虎害」の舞台として設定された、という推定が正しければ、感情的潤色という傾向も、きわまれり、という感もするところである。

以上、三点にわたって、『閑』と『撰』を簡単に対比してみたが、『撰』が、『閑』を模倣し、潤色したという永井氏の推定は、これらの比較によっても、さらに確かめられるように思われる。そして、その潤色の方向が、より、劇的、感情的なものへ、という方向であることも、前述によって明らかであると思われる。『閑』も『撰』も、たとえば『沙石集』や『宇治拾遺物語』などと比較するとき、前者は、ウェットで、「涙」の要素の強い、感情的表現でみだされており、後者の、ドライな、「笑」の要素の強さと対照的なのだが、中でも、『撰』は、『閑』よりもさらに、ぬれた

情念の発想においてきわだっている、ということが、先の三つのモチーフについての対比からも、言いうるように思われるのである。

(追記) 真如説話は、原『撰集抄』にはなく、増補された部分に属するという可能性も大だが、前記所論は、少くとも現『撰集抄』に關しては妥当するはずであり、また「ぬれた情念の発想」とでも言える特色は、原『撰集抄』に言及してもまちがいはない、と考えられる。()

〔余説〕

①『閑居友』撰述者が慶政であることは、永井義憲氏等の諸先学の論究によって確認されたといつてよい。以下、この、撰述者慶政の説に立って、主として、第一話に即して、その執筆意識の特色を一瞥し、あわせて、成立過程についての、若干の推測を試みてみたい。

すでに、「語釈」の關係項目でも触れたが、『閑居友』第一話には、『発心集』と、その撰述者長明への、拮抗意識ともいうべきものが、かなり濃厚に看取できることが注目される。

その第一は、『発心集』が、先行文献の説話を恣意的に再録したことへの非難を述べているところである。(この点は、小林保治氏「閑居友序説」に詳しい。)その第二は、編成の方法として、『発心集』のごとき、独立した序・跋を置かず、いわゆる「説話評論」的部分の言説で、その役割を代替させていることである。その第三は、仏教説話集における一種の理想像であった玄奘の説話を、『発

心集』は巻頭第一話に置いているのに、『閑居友』は第三話に置いていることである。

この最後の第三点に關わりつつ、成立の過程についての、次のような推測を補足するなら、『閑居友』の対『発心集』意識の側面は、さらに明らかにされると思われる。

すなわち、慶政の西山草庵隱棲を、平林盛得氏の考証に従い、承元二年(一一〇八)とするならば、「このあやしの山の中に身おかくしても八とせの秋おおくりきぬ」の一文をもつ、上巻第三話の成立は、当然建保四年(一一二六)秋と推定せざるをえない。しかし、上巻第一話の『発心集』と往生伝類との、人物・説話の重複に關する指摘は、慶政が、宋より帰國後、建保七年(一一二九)〜承久二年(一一三〇)の往生伝類書写の過程を経てはじめて明確になったものと推測すべきこともまた自然である。この二つの推測が正しいならば、第一話の成立は、第三話よりも、少くとも四、五年後であるとみなければならぬ。

とすれば、第一話は、承久二年前後、慶政が渡宋のため中断していた『閑居友』の稿を継がんとした時期に、冒頭に据えられた可能性が強いのである。

以上のことをふまえて、現第三話を検討すると、現第三話にも、序的性格をもつ記述があり、むしろ、現第三話の方が、慶政自身の、内的・本質的な、執筆動機・撰述の意図をより明らかに表白していることが知られるのである。

若干の想像の飛躍を許されるならば、長明は慶政にとつて、常に拮抗意識をかりたててやまない人物であった。歌人として、遁世者として、また、説話撰述者としてさえ、長明は、いつも、慶政に、先行し、優位している人物として、彼の前に立ちはだかる存在であ

った。

最初『発心集』と同様、玄賓説話を巻頭にすえた原『閑居友』を、渡宋前、慶政はしたためてはいたが、心中ひそかにこれにききたりぬものがあつた。

時に、たまたま、渡宋の機が訪れたのである。

渡宋が、当時、いかに、特権的宮為でありえたかは、くぐくぐしい説明を要しまい。

したがって、慶政の渡宋後、長明への對抗意識にも支えられつつ、書き改めらるべき巻頭説話の主人公として、真如親王ほどにふさわしい人物はありえなかつただろう。

この人も渡唐者であり、慶政同様疎外の貴人であり、熱心な求道者であり、なおかつ、慶政隠棲の西山・松尾の地のゆかりの人でさえあつた。永井義憲氏の推定に従えば、親王虎甞説という、渡宋者のみが知りうる新資料をすら、慶政は、かの地で入手してもいたのであつた。

他にも、渡宋後、慶政の従事した往生伝類の書写は、長明——『発心集』の、もう一つの弱み、先行説話の無批判な再録する特徴をも確認させた。

真如親王説話の付加教説部分の、極度に緻密な説話撰述の方法論の明示と、『扶桑略記』系の真如伝や、『大唐西域求法高僧伝』の引用表記や引用明示に関してのきびしさは、そんな対『発心集』——長明意識をも併せ考えることで、容易に納得しうるように私には思われるのである。(この余説に関連するものとして、本誌青山論文、原田論文も、あわせ参照されたい。)

②先述したように、『閑居友』第一話に真如親王が登場している理

由は、撰述者慶政の渡宋体験や、西山・松尾が真如ゆかりの地であつたなどの事情がまず考えられようが、これの著わされた時期が、明恵・解脫・日蓮らに特に著しい釈迦崇拜熱の盛行した時期であつたことも見落さるべきではあるまい。わけでも、明恵は、天台渡航を真剣に計画していたことは周知の事実であり、(『明恵上人行状記』)彼と親交のあつた慶政自身、明恵に「波斯人文書」を送つて、その渡天の志に応えたのでもあつた。(『高山寺旧藏波斯文書端書』)慶政より二十数年前渡宋した、臨濟宗の榮西も、実は、渡天の望みを有していた。(『興禅護國論』)真如説話が巻頭に選ばれた理由としては、こうした時代の宗教的気運も十分考慮されるべきであると思われ。

③話中に登場する「大柑子」は、柑橋類の実であることはたしかだが、記紀に伝える田道間守が、常世国から持ち来つたときじくのこのみ非時香菓も橘とされていて、常世——すなわち長寿の国を象徴するものであつた。『万葉集』の「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹」(一〇〇九)の歌も、橘と長寿の発想の関わりを暗示する。この説話で、真如のたずさえた実が大柑子であつたことは、生命の象徴としての役割も、それに担わされていたのではないか、とも考えられるのである。平川裕弘氏が、「オレンジと楽園思慕」(『批評』昭和四四—四)なる文章で、ゲーテの『ミニヨンの歌』や、アンデルセンの『即興詩人』や、佐藤春夫、木下杢太郎、北原白秋、高村光太郎らの、オレンジやレモン類に関する詩を博引しつつ、世界文学的にも、オレンジの類が、生命と不死の楽園のイメージと相伴なつて描かれてきたことを指摘しているのも、その意味で、示唆的である。

④本説話において、いわゆる丁寧の敬語の「侍り」の使用度をながめると、前半と後半で大きく異なることが見てとれる。前半、すなわち、「昔、真如親王といふ人」から、「しるしいれぬるなるべし」までの、いわば、説話部分と、後半の「昔のかしこき人」の、「天竺に」から、最後の、「おもふまじきなり」までの、いわば、評論部分というか、付加教説部分との、両者における、「侍り」の使用回数は、前半は3回、後半は14回なのである。古典文庫本でいえば、前半、後半共に29行で、量的にほぼ同じ文章中において、使用回数は、後者は前者の5倍近いという比率の差は驚くべきものがある（この傾向は第二話も同様である）。

これは、一言でいえば、教説部分は、説話部分と異なって、対読者意識がきわめて強烈である、ということの文法的裏付けとも見なしうるものであり、このことに因って、様々の興味ある指摘もなしうると思われるが、さしあたって今は、本話前半と後半にはそうした文体的差異がある、という事実を指摘しておくにとどめたい。

[資料]

『三代実録』『文徳実録』『続日本後紀』『本朝皇胤紹運録』『帝王編年記』『類聚国史』『扶桑略記』『東大寺要録』『和漢春秋曆』『密宗血脈鈔』『入唐五家伝』（特に『頭陀親王入唐略記』）『弘法大師行状集記』『江談抄』『入唐求法巡礼行記』『日本霊異記』『頭戒論』『金光明経』『梅尾明恵上人伝記』『大唐西域求法高僧伝』『発心集』『方丈記』『撰集抄』『本朝往生伝』『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』『本朝新修往生伝』『三外往生記』『今昔物語集』『古事談』『宇治拾遺物語』『沙石集』『興禪護國論』など（順不同）

〔二〕如幻僧都の発心のこと¹

昔²、如幻僧都といふ人^をはしるけり。もとはならの京東大寺にすみて、華嚴宗をぞ⁴ならひ給ひ⁵ける。その⁶ころ⁷善珠大徳学問のこうたかくて、ねぶ^りお⁸のぞき^り多^おのびて見えければ¹⁰、時の人もいみじきこと¹¹にいひあへりけり。僧都これをみて、我いかにがくもんすともこの人にまさるべからず。しかじ、この道^おあらためて、ひとすぢにおこなひの道におもむきて¹³、この人よりはさきだちて世のきこえをも¹⁴とり、位をも¹⁵あがらんと¹⁶おもひて¹⁷、くまのにもりて身をくだきほねをよりて¹⁸、ひとすぢにおこなひたまひ¹⁹けり。かゝるほどに、かたはらにわが^をこなひ²⁰を五六かきねたらん²¹ほどにおこなふものありけり。これを²²みてあさましと思ひて²³、さてもかくして世中にありては^{つる}には²⁴いかなるべきぞと思ひ²⁵つゞくるに、いとあぢきなくよしなくて、やがてはしりいでたまひにけり。

さて、はりまの国たかをだにといふ所におはして、他事なく、後世のおこない²⁶して、つねには心²⁷をすまして、華嚴經をぞよみたまひける。かゝるほどに、弟子にならむ²⁸とて、人あまたいできあつまりて、後にはほい²⁹なきほどに侍ければ、はなれたる所にあやしのいほりかま^ゑて³⁰、たゞ³¹ひとりと^{して}、くひものなども、みづからいとなみて、弟子^おば、³²とき^くぞこさせける。あるとき³³、「いま、七日^ばかりは、きびしきおこなひをする事³⁴侍べし。ゆめ^くきたること³⁵なかれ³⁶」とありければ、そのほど³⁷人ゆきかふ事なかりけり。日ごろ過て³⁸、いほりのほどにいひしらぬにはひの侍ければ、あやしくてみければ、てを³⁹あはせて西にむかひて⁴⁰いのちつきたまひ⁴¹にけるなるべし。その⁴²としは六十二。ころは⁴³十二月二日にて⁴⁴侍ける。くわんおん⁴⁵を本尊にしたまひ⁴⁶けるとかや。この人の事、往生伝に侍めれど、このことは侍らざめれば、しるし侍なるべし。かの伝には、唯識^目明⁴⁷の道を⁴⁸あきらかにならへると侍にや。また僧都に⁴⁹なれるよしも見えず。もし僧都といへるは、ひが事⁵⁰にや侍らん⁵¹。かのはりまのたか

をだにゝゑにかける御すがたのをはする⁽⁵²⁾は、きのしたに、いしをしきものにて、ひがさと経ぶくろとばかりを、きたまひたるすがたとぞきき侍し⁽⁵³⁾。発心のはじめより命終まですみておぼへ⁽⁵⁴⁾侍り。

〔校異〕

1 こと↓事(譚・無・類) 2 昔↓むかし(譚) 3 をはし↓おはし(譚・無・類) 4 をぞ↓おぞ(為) 5 給ひ↓たまひ(為・宮・譚・無・類) 6 その↓其(宮) 7 ころ↓ころは(譚・無・類) 8 ねぶりお↓ねぶりを(宮・譚・無・類) 9 うゑお↓こゑを(譚・無・類) うゑを(宮) 10 見えければ↓みえければ(無・類) 11 こと↓事(譚) 12 道お↓道を(宮・譚・無・類) 13 おもむきて↓をもむきて(譚) 14 きこえをも↓きこえをも(宮) きこゑおも(為) 聞えをも(譚) 15 位をも↓位おも(為) 16 あがらんと↓あがらむと(為・宮) 17 おもひて↓思ひて(譚・無・類) 18 ほねをよりて↓ほねをおりて(譚・無・類) 19 たまひ↓玉ひ(譚) 20 をこなひ↓おこなひ(譚・無・類) おこない(為・宮) 21 らん↓らむ(譚) 22 これを↓これお(為) 23 思ひて↓おもひて(為・宮) 24 つるには↓ついには(為・宮) 25 いかなるべきぞと思ひ↓いかなるべきことおもひ(譚) いかなるべきことゝおもひ(無・類) 26 おこない↓おこなひ(譚・無・類) 27 心↓こゝろ(譚・無・類) 28 ならむ↓ならん(譚・無・類) 29 はい↓ほひ(類) 30 かまゑて↓かまへて(宮・譚・無・類) 31 たゞ↓ただ(類) 32 弟子おぼ↓弟子をば(宮・譚・無・類) 33 あるとき↓ある時(無・類) 34 事↓こと(無・類) 35 こと↓(為・宮・譚・無・類) 36 なかれ↓ななかれ(譚) 37 そのほど↓その(譚) 38 過て↓(為・宮・無・類) 39 てを↓てお(為) 40 むかひて↓むかひて(類) 41 たまひ↓玉ひ(譚) 42 その↓其(宮) 43 ころは↓「ころは」の「は」傍書(為) 44 にてぞ↓にて(譚・無・類) 45 くわんおん↓くはんおん(類) くわんをん(譚) 「宮」「譚」「無」は「は」ともよめる 46 たまひ↓玉ひ(譚) 47 「為」は目「底本」「宮」「無」は目とも因ともよめる字体 48 道を↓道お(為) 道に(宮) 49 また僧都に↓僧都に(譚・無・類) 50 ひが事↓ひがごと(無・類) 51 侍らん↓侍らむ(為・宮) 52 をはする↓おぼはする(無・類) 53 きき侍し↓きき侍し(宮・譚・無) 54 おぼへ↓おぼえ(宮・無・類) 覚え(譚)

〔通釈〕

〔二〕如幻僧都の発心のこと

昔、如幻僧都という人がいらっしやうた。もとは奈良京にある東大寺に住んで華嚴宗を（師から）習っておられた。その頃、善珠大徳は、積年の学問の誉れ高く、睡眠をきりつめ、飢えをしのんでいのように見受けられたので、当時都にあつた人々もすばらしいことだと語りあつていた。如幻僧都は、善珠の（学問に志すひたむきなこの）姿を見て、「自分はどんなに学問をしてもこの人の上に出ることはできない。学問の道に志すことを改めて、ただひたすらに仏道修行の道に専念して、（立派な行者となり）善珠大徳よりも先に世間の名声をかち得、位もあがるにこしたことはない。」と思ひ熊野に籠つて身をくだき骨を折るような難行苦行をして、ひたすら修行に没入なさつていた。このような難行にあげられていられるうちに、彼のすぐわきでこの修行（の程度）を五つ六つ重ねたくらいに激しい修行をしているものがあつた。これを見て如幻は、「あきれたことよ。」と思つて、「ほんとにまあ、（上には上があるものよ）。こんな名利を追い求めるような生活をしてはしまいいにはどんなにひどい事態に出くわすことやら（恐らく地獄に墮ちてしまうのが関の山だ。）」と思いつづけていくうちに自分の誤つた生き方に思いをはせ、やる瀬ない悲しい気持ちに襲われ、その気持ちをどうしようもなくそのまま出奔なさつてしまつた。さて、それから播磨のたかを谷という所にいらっしやうて、他のことには目もくれず、後世の救いを頼み仏にすがつて平常は心をすませて華嚴経を誦んでいらっしやうた。そうしているうちに、弟子にならうというので人がたくさん出て来て集つて、後にはあまりに大勢となり不本意なほどになりましたので、離れた所にみすばらしい庵をかまえてそこにただ一人

で住み、食物なども自分一人で調理して、（さしつかえのない程度に）時々弟子を來させていた。或る時「今から七日間にかぎつて激しい修行をすることを予定しています。決してここに来てはいけません。」という如幻の言葉があつたので、その間彼の庵にいききするものはなかつた。定められた日数が過ぎると、庵のあたりにいい知れぬよい香りがしましたので、不思議に思ひ行つて見ると手を合わせて西に向かつて命が尽きなさつていたようである。享年六十二歳。頭は十二月二日のことでした。彼は、観音を守り本尊になさつていたとか。この人のことは、往生伝にあるようですが、このことはいやうですから記した次第でございませう。彼のことを記した伝には、彼が唯識・因明の道に精通するまで習つていたとあるようです。また僧都になつたということも書かれていない。もしや僧都といつてゐるのはまちがひなのでしょう。かの播磨のたかを谷（の寺）に、絵に描いた姿があるが、それは木の下に石を敷物にして、日笠と経ぶくろとその程度のもを身におつけになつてゐる姿だと私は聞いたことがある。熊野から出奔して、後世を仏に頼む心境でたかを谷に住みはじめてから命が終るまで、彼の心は雑念がなくすみきつていたと思われれることです。

〔語釈〕

○如幻僧都 生没不詳。十二世紀頃の人。もと叡尊と称し、発心後如幻と号した。良覚に師事して華嚴経を学び、東大寺にて唯識・因明の道を究めた。後、播磨国高和谷に性海寺を開き人々を教化して尊崇された。或る年の冬十二月二日、観音を念じつつ西に向つた姿勢で往生した。享年六十二歳。彼の往生は、多くの人々の夢の中で示現された。なかでも備中国某人のそれは、七宝車が西方に飛行

するのを見ていと傍らにいた人が、これこそ如幻上人の往生だと語ったエピソードが伝えられている。○発心 学解の高僧として徳をあらわしたり、験者として名声を勝ち得たりすることではなく、雑念をはらって、仏の慈悲にすがり弥陀の浄土に往生して救われようとする願いを起こすこと。○もとは 学僧として声望の高い名僧となる目標を持っていた頃をいう。○すみて 寺や僧房に身を置いて修行に励むこと。◇(道昭和尚)到此土造禅院寺、而止住焉。…遂任禅院為諸弟子、演暢所諸衆教要義。(『日本霊異記』(上)22)年来此ノ二人ノ人同ジ房ニ住テ修学スルニ…(『今昔物語集』卷十五—一)○華嚴宗 南都六宗の一。釈迦自身が悟りの内容を弟子の文殊と普賢に語ったと伝えられる内容を有する華嚴経をもとに成立した宗派で、日本へは道璿が天平八年(七三六)に伝え、四年後に新羅の審祥が東大寺で講じたことからはじまった。後、良弁が東大寺別当となった時にその基礎が築かれ、天暦元年(九四七)には、如幻の師良覚から法系で五代前に位置する光智が同寺に尊勝院を建てて修行の場とした。その中心思想は「一則一切、一切則一」にある。即ち、一はすべてであり、すべては一に帰するというのである。○ならひ 『今昔物語集』の用例から見ると「受ケ習ヒ」と熟する場合が多い。師から教えを受け根気よく学ぶこと。◇法花経ヲ受ケ習ヒ、頭密ノ法文ヲ学スルニ…(『今昔物語集』卷十二—33)亦真言ヲ受ケ習ヒテ、…(同卷十二—37)師ニ随テ法花経ヲ受ケ習ヒ(同卷十三—29)○そのころ 「もとは」というに同じ。最高の学僧となるため華嚴宗を習っていた頃。○薈珠大徳(養老七年—延暦十六年・七二三—七九七)俗姓阿刀連。幼にして聡明。興福寺に入り玄昉に従ひ法相宗を学んだ。唯識・因明の巨匠。後に秋篠寺をひらいたため、秋篠の僧正と称された。また、

延暦元年に護持僧の功を以て僧正に任ぜられた。最澄が叡山に根本中堂を建て、落慶供養の日に導師となる。これより先、彼は藤原種継事件の際に、早良皇太子に慈悲の心で接したためと皇太子亡きあ出現したあたりをのぞくための祈禱僧として重用されてもいた。当代きつての学僧で、『唯識燈明抄』『唯識肝心』『因明論燈抄』をはじめ膨大な著書がある。また宮中ときわめて密接な関係にあり、平安遷都の際にも即刻新京に移住している。以上の点からして薈珠は奈良仏教を代表する貴族的な学解の巨匠であったといえる。○こう 功。長年月学問や修行に励んで体得したものを賞讃するというとば。◇書写の上人は、法華説誦の功つもりて六根淨にかなへる人なりけり。(『徒然草』69)三昧堂の方に、千手経をぞいみじく功入りたる声の尊きにて読むなる。(『狭衣物語』卷二)○ねぶりをのぞき 一般に遁世者は生死無常のことを思い、眠られないのを理想としたが(『撰集抄』卷二—5)、実際に行を実践している時にもそうした状態にあった。相模国大庭野の聖がその好例で、「坐禅の床のうへにては、ねぶりをしのぎうゑを忘れ…」とある。しかし、学問に専念している善珠の場合は、時間を惜しんで睡眠を充分にとらなないのである。◇十三と云ける年の春の比、山階寺の別当空晴の室に入て侍りけり。一を聞いて十を知り、十を習うては百を悟るのみならず、飢ゑをしのぎ眠りをしのぎて素月の光に向ひては、夜もすがら唯識十軸のひもをとき、深恣に雪をあつめ、螢火をもとめて学問怠らざれば、ほどなく一登して別当年久しくし給へりけり。(『撰集抄』卷六—3)○うゑをしのびて 空腹などに心を動かさずに。学問に集中した心が弛緩するからである。遁世者の間でも、竜樹菩薩が「身を益して馬をやしなふがごとくはすべからず。」とか、天台大師が「食の法たる事は、もと身をたすけて道にすゝま

むがため也。」(『閑居友』上巻13)という言葉が信奉されていた。物を多く食べれば怠りの心が生ずるといのである。総じてねむりをのぞき、うゑをしのぶ場合、学解の人が時間的制約に多くその原因を求めていたのに対して、通世者は生活体験として肉体的安樂は往生の妨げとなると受けとっていた。○いみじきことに「に」は断定の助動詞連用形。「いみじ」は程度の甚しいことをいうのが原義だが、ここでは賞讃の意味に用いられている。○しかし「この道をあらためて……位をもあがらむにはしかじ」の倒置。この場合、正しい形としては「しかじ……には」となる。◇只糸竹花月をともにせんにはしかじ。(大福光寺本『方丈記』)しかじ、けふいくさをすすめて、すみやかに長安の道にかへらんには。(『松浦宮物語』)本書においては、この文形がすべて不完全な形であらわれる。◇しかし、はやくこゝよりゆきわかれなんと思てやをらはひかれにけり。(上巻5)しかじ、はやくかかるうきよの中をのがれて後世とらむとおもひて、やがてなんはしりいでにし也。(上巻14)○この道 学解の高僧となる道 ○ひとすぢに 他のことは考えずにただひたすらに。◇ことわざなく一すぢに念仏をぞ申ける。(『閑居友』上巻11)○おこなひの道 難行苦行の実践を通して佛法を体得し、修行者として法力無比の僧となる道。○おもむきて生きる目標を自分の意に沿った道に移行していき。○くまのにこもりて 古来熊野は吉野と共に修験者(山林仏教徒)の多く籠ったところである。日本の焼身往生の初例といわれる応照法師(『本朝法華験記』上巻9)や験力技群の淨藏法師(『捨遣往生伝』巻中)がその好例である。○身をくだき骨を折りて 難行苦行をしたことを示す比喩的表現。粉骨碎身。◇幼くより行ひの道に心すゝみてなん侍る。宮仕せじと親のもとにかくて侍れど心も止まらず、身を碎き

て山林にまじり給ふ人なん羨ましくおぼゆる。(『宇津保物語』忠こそ)「身をくだく」が肉体的苦痛を伴うものならば、「胸をくだく」「心をくだく」は精神的苦痛をあらわす。◇かかる事の聞えあらんに、我身はやがていたづらになりなんずるぞかしと心をくだき涙を流しつゝ法華経を読み、おこなひをのみし給ひて……」(『浜松中納言物語』巻一)○五六かかねたらんほどに 自分の難行苦行の程度を五つ六つ積み加えたであらう程度に、◇その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねたらんほどしてなりは塩尻のやうになんありける(『伊勢物語』9)○さても 感動詞。ほんとにまあ。あきれかえつて呆然とした心境。この部分を副詞にとつて「そのままでこんなみじめな状態で……」と考えても意は通ずるが、ここは上の「あさまし」につづいて思わず浮かんだ意識として感動詞ととりたい。また、「さても」の下に「かくして」という言葉が来ていることから副詞にとれば「さ」と「かく」の内容が重複することからさう考えるのが穏当である。◇何の罪にてかゝる目を見給ふらん。さても何の身にならんとかゝるわざをし給ふらん。(『落窪物語』巻二)○かくして世中にありては このように名利を追い求めて生活していけば、自分の能力を上まわる僧の存在を知り、二度も挫折感を味わったことよつて功名を自さす生き方に疑問を抱く心境になる。○いとあぢきなく まことに世の中がいやになつて。「あぢきなし」は語源的には「あ+「つきなし」で、自分の志したことが予測通りに運はずどうにもやりきれぬ悲しい気持ちに覆われることをいう。◇しばしかしこにあらん。かくてゐたればあぢきなく、こなたへもさし出で給はぬも苦しうおぼえ給ふらん。(『和泉式部日記』)○はしりいでたまひにけり どうしようもないいたたまれぬ気持で熊野山中からとび出したことをいう。「発

心」の道を思いやるにつけ、今まで名のある験者にならうと勵んで来た熊野には安閑としておれない心境になったのである。この種の表現に①のびはしりうせにけり。(『閑居友』下巻3)②にはかにはしりいひでてこゝかしこあともさだめずぞありける。(『閑居友』下巻6)などがあるが、類似表現として①カキケツ椽ニ失テ行方モ知ラズト。『發心集』卷一—1)②かきけつやうにうせたまひにけり。(『閑居友』上巻4)③かき消すやうに失せてけり(『撰集抄』卷二—8)などに見られる「かきけつ(消す)」という言葉を用了ものが頻出する。山口仲美氏は、「かきけつやうにうせぬ」(『説話文学研究』第六号・昭和四七年三月)の中で、「かきけつやうにうせぬ」という表現は平安中期頃にはわずかに『大和物語』『枕草子』に若干あらわれているに過ぎず、末期に至り『今昔物語集』の怪異説話に限って急に頻出して来る旨を論じられ、この形が中世に至って開花したと述べられている。中世においては、山口氏のいわれる神仏・靈魂・妖怪など非現実のものを素材とする説話に加うるに、この表現は遁世の志を抱いた僧が姿を消す際にかなり一般的に用いられている。○たかをだに『三外往生記』では、「到播磨国、住高和谷。」とあり、『三國仏法伝通縁起』卷中では「如幻僧都播州立寺名曰性海。」と報じている。『密教大辞典』(密教辞典編纂会・内外出版株式会社・昭和七年八月)によれば、兵庫県明石郡押部谷村高和にあり、聖武天皇が行基に勅して建立させたものであるが、白河帝の時に如幻上人が再興したという。『峯相記』では離念上人の開基という。また、『播州名所巡覽図絵』卷二によれば、「性海寺号高和山。高和村中に寺あり。坊舎六院、真言宗、開基行基。本尊阿弥陀如来觀世音。往古は勸願所の巨刹にて中興釈如幻なり。十丁許奥に如幻の堂あり。焼亡後は小堂を営み今僧房十

二、繪院宣尊寺の宝として教多し。」とある。○他事なく「ひとすぢに」というに同じ。○後世のおこなひ 来世に弥陀の救いにより極楽往生を願って一心に仏事に励むこと。そういう人を「後世者」といった。◇まことによるひる念仏のこゑ意る事侍らねば人々もまことの後世者とこそとて賞みて……(『撰集抄』卷七—15)○心をすまして 雑念をはらって ○ほいなきほどに侍ければ、 弟子をおまき、衆生に仏縁を結ばせるために教えを説くことは大切なつとめの一つとは思っているが、それが程度を越すと心の静けさがかき乱され、はては西方浄土に往生することが不可能となり、最も大きな目的が成就できなくなることをいう。本意とは、かくあるべしと考える理想的なものを志向する心的内容であり、ここでは往生を遂げることを意味している。◇思ひのごとくに僧都の教化にあづかりて本意のままに往生し給ひてけり。(『撰集抄』卷九—3)○はなれたる所にあやしのいほりかまへて これも常套の表現であり、益田勝実氏のいわれる再遁世(偽悪の伝統「文学」・昭和三十九年一月)の時にきまって用いられる。◇はるかなる所にあやしのいほりむすびて、たゞひとりおりけり。(『閑居友』上巻12)如幻のこの行為は、次の真範僧正のたどった道と全く同一である。◇あるわらはべの申すやう「此山の庵のうちに貴げなる聖のおはしけるぞ。そぞろ事な聞えそ」とて、その後人おほく集りて、みな拝み侍りければ、「われ本寺をはなれ侍し事は、徳を隠し心の底ばかりをすまさんとてこそ離れしか。又ここに徳あらはれにけり」と本意なくて、いづちともなくまどひ出て、ひとへにつたなき様をしてぞさそらへ歩かれける。(『撰集抄』卷五—9)○いとなみて 調理して。◇ちからをつくせるたき木にてこれをいとなみ……(『閑居友』上巻13)ある時、種々の食物をいとなみてつねに飼はれる犬にたびけ

る程に……（『撰集抄』卷五―三）○弟子をはときくぞこさせける 弟子たちの来ることが支障ない場合は時々来させた（来ることを許した）。如幻の方で何か用事がある時に限って呼んだというのではない。弟子どもが教えを受けるために庵室を訪問したい希望を持っていてを知っていたから、本意にそむかぬ程度に来ることを認めたのである。○七日ばかり 七日間にかぎって。限定の意味。このように日を限って人を近づけずに往生した例は『撰集抄』にも見られるが、殆ど五日間ということになっている。◇ある時、人の食を持ちゆきたりければ、「今日より五日はさしな入り給ひそ。ちとつゝましき事侍り。」と云。（『撰集抄』卷五―二）「いま五日はゆめくたれくもさしな入り給ひそ」と云ければ……五日のあかつきより念仏の声とだえしければ、人々あやしみて行てみるに、西にむきて手をあはせて、ひき入にけり。（『撰集抄』卷七―15）○きびしきおこなひ 弟子たちを遠ざけるための口実ともとれるが、死期の近づいたことを知った如幻は、往生の完璧を期して、一切の雑念を払いひたすら誦經に専念しようとしたのである。『本朝高僧伝』卷二では「一日罹病」と伝えてある。○いひしらぬにはひ芳香。行業篤き人が往生する際には、天上に妙なる楽の音が鳴りわたり、美しい光明が輝やき芳香が漂うのが常である。◇清原真人信俊……異香薫室、人染奈芳。後教日、葬北山、収斂之間、共香不尽。（『本朝新修往生伝』）本話を書承していると思われる『三國伝記』（八一―八）も「庵室ノ辺ニ異香薫シ靈光輝ケリ」と敷衍している。○としは六十」。……くわんおんを本尊に……『三外往生記』に「生年六十二。冬十二月二日、其身凭凡。奉念觀音。」とあるに依る。○往生伝に侍めれど 『三外往生記』をいう。○唯識 法相宗の中心的教義。われわれの目前の事象は心の作用によつては

じめてその存在が認識され得るもので、悟りの域に達しない段階においては、虚像を心の中にうつし出す。しかるに、ひとたび唯識の奥儀に至れば、認識の方法が理になつて普遍的な智を体得することができるといふ。その識は、五識（視聽嗅味触）と意識と末那識及び阿頼耶識とで成立している。日本には、道昭によつて伝えられた後、百濟僧の智鳳や玄昉らによつて弘められた。○因明 五明の一。古代インドに端を發した論理學。宗・因・喻の三支をたてて論理を展開する。陳那以後の新因明とそれ以前の宗・因・喻・合・結の五支を以てする古因明とにわけられる。論を立てる上で、因が最も大切であるので因明といふ。○僧都になれるよしも見えず 『三國仏法伝通縁起』にはこの旨がするがその成立は応長元年（一一三二）であるので、『閑居友』成立の承久四年（一一二二）から九〇年程後の記録である。『本朝高僧伝』も、『三國仏法伝通縁起』を引用している。○ゑにかける御すがた この部分は「きき侍し」とあるから、慶政が直接に性海寺関係者から聞いたものと思われる。『閑居友』下巻6・7は、彼が渡宋した時に入手したものが、何れも通世者が絵姿となつて残され普及している旨が記され、下7ではそのような絵を買う人は皆無で、また描いて売らうとする人も稀であるといつてゐる。如幻の場合は、恐らく性海寺に門外不出の形で保存されていたものであろう。このような肖像画が売買はされなかつたにせよ、かなりの数描かれていたことは次の例でも確かである。◇あまりに悲しかりしかば、閑居友としたてまつらまほしくて、涙をのごひて、おろくかの姿を絵にとどめてとりて後、煙となしたてまつりて、野辺の聖の方へゆきてみれば……（『撰集抄』卷六―8）その様体をうつしとどめて、おなじ所に据ゑ給へりける、いまに侍り。かたびらの肩の落ちたる着て、こもと

いふ物をうしろにひきかけ給へる姿なり。(『撰集抄』卷三—4) ○ひがさと経ぶくろとばかりをきたまひたる ひがさと経ぶくろだけ身をにつけなさっている意。これを「を」+「着たまひたる」ではなく「置たまひたる」と読んで「ひがさと経ぶくろを身辺に置なさっている」とも考えられるが、『撰集抄』卷三—8で、「そのすがたは髪なども長くて、かたびら一にひがさと云物をき給ひたる也。」とある例から推しても、身にまよってしていると考えるのが妥当である。○発心の……すみておほえ侍り 心のすみきつた様を賞揚する表現は『閑居友』に頻出するが、この部分の表現がそのままに『撰集抄』(卷二—3)の播磨国平野に通世した法師についてあらわれている。◇発心のはじめより命終のきはまで、すみてぞ覚え侍る。(近衛本『撰集抄』)

〔鑑賞〕

本話は、如幻僧都が最初東大寺において当代一流の学僧となる志を立て、次は熊野山中で修行を積むことにより法力無比の行者になろうと決意し、更には播磨国のかかを谷にて発心し、ついには往生のさわりとなる雑音を避けてあやしの庵をたてただ一人心静かに住むまでの変転を描いたものである。彼のこの四場面の生き方の展開をあつづけていくと、まさに日本古代から中世へかけての仏教史の縮図を見る観がする。その人生は、一面からすれば敗北者の姿かもしれない。しかし名利を追求していく限り、前面に大きな壁が立ちただかり志を貫くことがとうてい不可能であることを彼は体験を通して悟らざるを得なかった。このよう挫折感が、彼に真に生きてゆく道を模索させたのである。たかを谷に移ってからはひたすら弥陀にすがって後世をたのむ生活に目をひらいていった。つまり現世の栄

達を望む生き方から後世の極楽往生を切に願う態度へと変貌を遂げていったのである。したがって、彼が東大寺から熊野に入山した時の心境、熊野山中からたかを谷へと姿を現わした際の情況と、たかを谷から近くのあやしの草庵にひき籠った事情はそれぞれに異なった面を持っていた。即ち、最初の山籠りは修行者として立派な験者となり名声を得ようと考えてのそれであり、次の出奔は現世の榮譽に連なる道を喪失した悲しみから来世の世界に思いを馳せて発心したことに起因し、最後の隠遁はすみきつた静かな心を保ち弥陀の浄土に往生する大望を果たすための行為であった。したがって、居所をかえることに彼の心は自在なひろやかさを持つものになっていた。即ち煩瑣な教理からの脱却、酷烈な苦行からの解放、寺僧(教化者)生活からの離脱という段階を踏んで、ただ極楽往生という一点を指して仏に身をゆだねていったのである。そして、その救いを希求して静かな草庵での生活ぶりが最高のものとして位置づけられている。如上の如幻の精神構造の展開過程を眺めると、そこに中世の隠者・文人たちによって彼が通世者として仕立てられてゆく状況を窺うことが可能である。小林保治氏は「『閑居友』序説(二)」(早稲田大学教育学部学術研究第一七号・昭和四十三年)の中で如幻に関して本書の記述と『三外往生記』のそれとを比較して、『閑居友』の編者の手法につき、「往生者の伝記に新たな小事を付け加えたというより、△再出家△ということを主題にして新しい一話を構成したという方が、その評価としてはより適切であると思われる。いってみれば、僧の所伝として必要不可欠の重大事が附加されることで△往生伝△が△通世者譚△へとめざましい変質を上げているのである。」という重要な指摘をされた。ここではその目ざましい変質が、段階的・図式的にきわめて鮮明な形をとって表現されて

いる点に注目すべきものがあろう。

〔余説〕

①さて、かくして世中にありては、つひにはいかなるべきぞ。この部分を「通釈」「語釈」の欄で述べたように名利を追求した誤った生き方をして来たことに気づき、このままでいけば墮地獄の憂目を見るだろうと自覚しているように考えるのが穏当だと思ふ。しかし、ここで「いとあぢきなく、よしなくて」の「あぢきなし」について考えてみよう。

この言葉は一般に失望の上もない気持を述べる場合に用いられて、「おもしくくない」とか「なまげない」というように訳されている。河辺名保子氏は「はじめ対象に惹かれていた気持が一転して投げやりなものになってしまふような、いわば興味索然といった感情を表わす」（源氏物語ハンドブック・「解釈と鑑賞」・昭和三四年一〇月・至文堂）と考えられる。『枕草子』の「あぢきなきもの」では自発的に奉公人を志願して出仕した人が怠惰にしていることやとり子の顔が憎い時、また娘が気乗りうすの婿を強いて親が決めて、その結果思うようにかぬことをなげくなどの例が挙げられている。如幻の場合も目標を立てて頑張るところまではよかったが、挫折したことからどうしようもないやる瀬ない気持に襲われ、大野晋氏のいわれる「にがにがしいよりも、むしろ、もうどうにもならないというあきらめと、悲しみの心持」（『日本語の年輪・有紀書房・昭和三六年九月）がわきあがったのである。以上のことから考えると、如幻が学解の僧、超人的験者となることを目標にして大いに奮奮したこと、それが挫折したことに對する失望をこの「あぢきなし」は表わしているのではな

らうか。敵密にいえば自分のたてた目標と結果とのギャップがマインスマ面に働くほど「あぢきなし」なのである。したがってここは石川徹氏のいわれる、人生は努力相應に報いられるものではないことから不満の気持を残存させながらも沈くこうした不合理な人生を悲觀的という場合の心境（『源氏物語必携』所収「源氏物語彙辞典」・学燈社・昭和四二年四月）であるとすれば、如幻はまだ発心する段階に至らず、ただ当面の生きる目標を失った絶望感が彼を熊野から出奔させたのである。その場合、この部分は「精いっぱい努力して来たのに希望が達成されないことを思い、どうしようもない悲しみと不満な気持に襲われて」というような意味になる。そして彼が発心したのは熊野を出奔してからたかを谷に出現するまでの間ということになる。この問題について更には後考に俟ちたい。

②後世のおこなひ 具体的には、米世極楽浄土に往生することを願って経を読む、専一に弥陀の救いを信ずることをいう。したがって、華嚴経を読むにしても詳細に意味をきわめていくという必要はなく、心に往生を期し、すみきった気持ですら／＼とよどみなく誦経するのである。『言芳談抄』にも「学問無用といふことも、分際あるべきことなり。器量あらむものは、形の如く往生要集の文字読み風情のことをもて、生死無常のくはしきありさま念仏往生のたのもしき様など、時々、繰り見るべきなり。」と学問の必要を説く。しかし学問する場合、「文々句々分明に存知せむなどいふ志は、ゆめゆめあるべからず。ただ、文字読みなどしたるに、安らかに心得らるる体なり。」（51）と教仏房のことばとして往生者の心得を述べている。往生には高度な学問は何の役にも立たぬことを智光・頼光の往生譚（『日本往生極楽記』10）

は明白に提示している。

③弟子をばとぎくぞこさせける 「心静かで、弟子の訪問を受けても大丈夫というゆとりのある感じの時だけ庵に来ることを許して来させた」という意味にとりたい。これをもし「自分の身のまわりのものを整える必要が生じた時にだけ弟子たちを呼んで食物や衣類などの調達を命じようとした。」と考えると随分勝手な遁世者となり、如幻像と矛盾を来たす。遁世者とは、もともと食物がなければ、里に下って自分で施しを受けたら、見るに見かねて人々が施しに来る食物を得て命をつなぐのが一般的であった。◇そのかみは里へいで侍りしかども、いまは又惜むべきほどの命にも侍らねば、あるにまかせて、里へもいで侍らねども、人のときぐたづねきたりて、いのちを継ぐにあり。(『撰集抄』卷三―五)なおこの問題については、石田吉貞著「中世草庵の文学」(河出書房・昭和一六年)参照。

④如幻と善珠の關係 如幻は生没未評であるが、『諸嗣宗脈記』下巻に依れば、彼の師は良覚で、良覚より法系にて五世前の師が光智である。光智は天曆元年(九四七)に尊勝院を建立して、華嚴宗の振興を図った。また如幻の兄弟弟子の景雅のそのまた弟子高弁は承安三年(一一七三)から寛喜四年(一一三二)まで生存した人である。以上のことから十二世紀頃に生存したであろうと考えられる如幻と八世紀に活躍した善珠の二人は全く時代を異にしたのである。先にあげた『密教大辞典』の性海寺の項に白河帝の時に如幻上人が同寺を再興したとあることは重要な指摘であろう。そこで、「僧都これをみて」という部分を「如幻僧都は、昔善珠大徳が猛烈な勉強であったことを聞き知って」と考えてみたくなるが無理であらう。

⑤本話が『閑居友』の中に収録された時期は、慶政が宋園から帰国した建保六年以後と考えられるが、彼がこの頃本書の編纂の事業と並行して各種往生伝類を次々と書写していたことから、『三外往生記』を手がけた承久二年秋頃と推定される。冒頭話の真如親王伝と本話及び女賓説話との収録過程を考えることは、『閑居友』の成立過程を解明する端緒となり得よう。

〔資料〕

『三外往生記』21 『三國仏法伝通縁起』卷中 『三國伝記』卷八―8 『諸嗣宗脈記』卷下 『本朝高僧伝』卷二一 『播州名所巡覧図絵』卷二 『播磨鑑』など。